



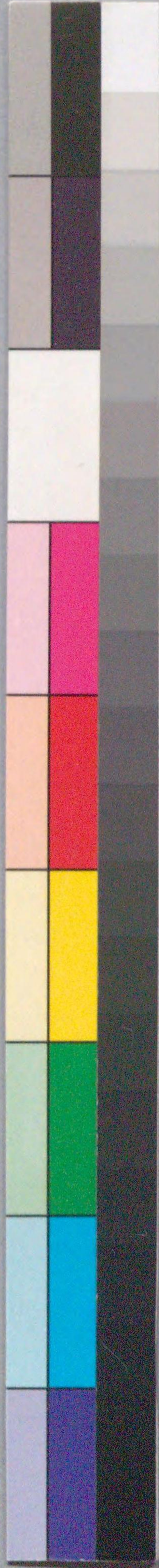
花
廻
志
満
臺
五

208
12
694



国立国会図書館 花廻志満台 4編 208-694

ガラス使用



比翼
連理

花廻志満台

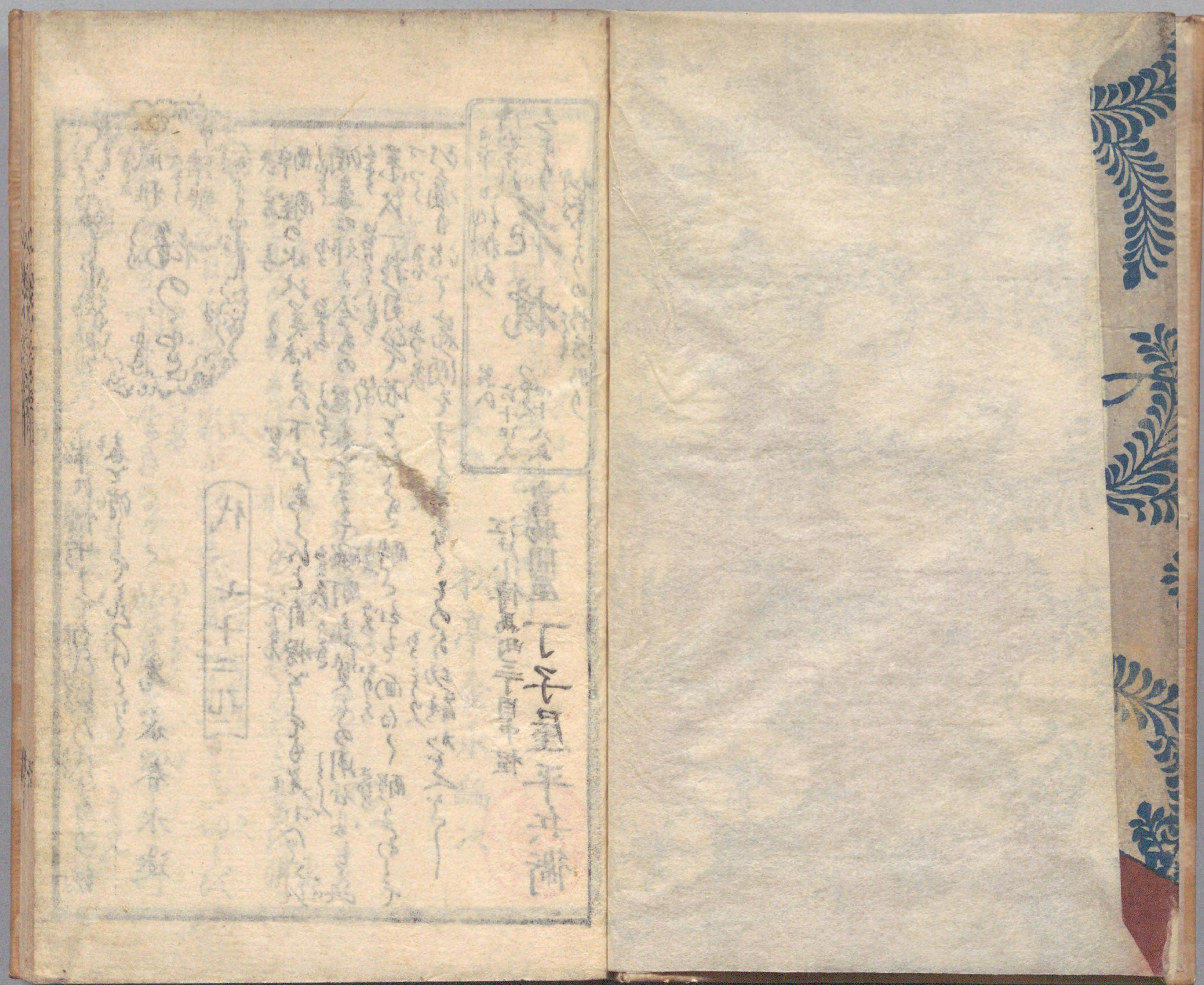
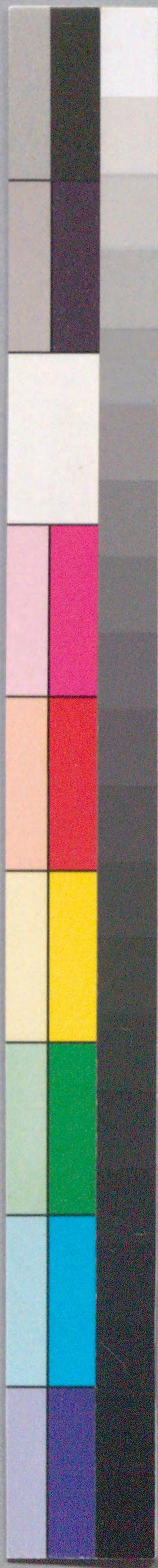
二編
中

208
12
694



国立国会図書館 花廻志満台 4編 208-694

ガラス使用





梅の香
為永春水述

代 七十二孔

酔醒の水は美味さへ下戸者くばと自慢するも不承不承
酒毒の外は冷みの恩恵とまき酔醒酒毒の用はよも此
系紋一精用ひて物と望み酔醒と云ふ面白く醒あわて
頭痛も治す為酒をすらす事なくその外功効かどく

日本一四代梅
花橋
若入
六十二
四十八

江戸小傳馬町三丁目中程
書物問屋 丁子屋平兵衛

花廻志満
臺二編卷之中

東都 松亭金水編次

第九回

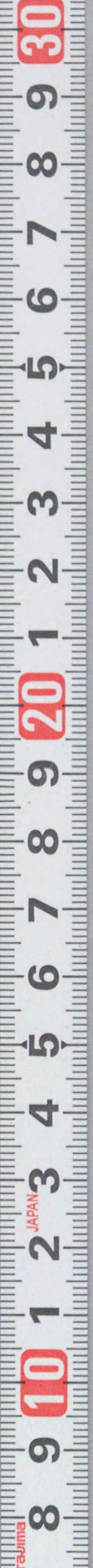
あふ豊者色るる髪結のお古の復のふきけふまの
しくおまが父のき清を祀りぬ胸むやくと業成清
しくその日くまご家よかまが身相く一ゆまごゆきけ
梅をあらう明こと暗きるるがう 梅心員とまごゆきけ
石と強一そ志まろてくう人そまご戯みこまご成が



ちぢやアひハひ手てををははくく後の人ひとヨヨ誰たれぞぞああででももおおけけかかけけややア
 一一筋しんのの大おほ口くちがが大おほききううはは深ふかくくわわるるううごごトト對たい身みももる
 ききふふ一一人ひとでで志こころれれ返かへりり大おほ口くちううちちつつけけくく跡あとももうう法はう一
 おおぐぐとと極ごく一一消けい差さをを大おほ口くちいいままててああままつつけけりり持もち
 出いししるる酒さけ瓶びんとと好えん湯たうややぐぐてて茶ちや碗わんへへははぐぐ酒さけ瓶びん自じ身みをを
 ももつつりりでで飲のみみ手て一一ままつつけけてて二ふたッつ酒さけ瓶びんののかかざざり
 茶ちや法はう酒さけののままつつ一一とと蒲ふ索さくののかかざざりり茶ちや後ごももままつつてて飲のみみ手て一
 一一つつのの女に子このの巫ま乃のととハハ又マ之シののきき初はつめめををままつつりり七しち八はち

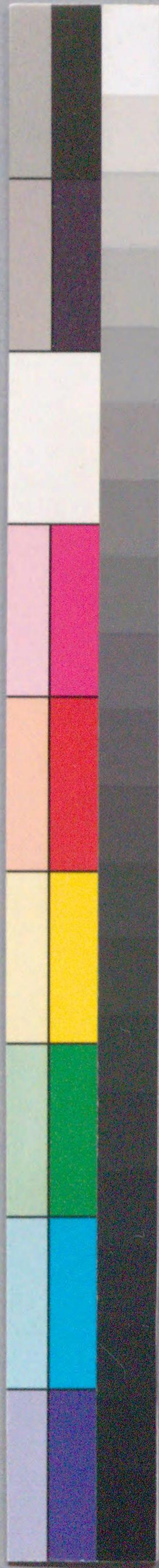
目めのの活かつ業ぎやうああももおおぐぐししてて解わくくううのの茶ちやええ酒さけええけけ次つぎ
 身みふふ人ひと我われののままつつてて酒さけののままつつてて強つよつつけけくく口くちををね
 ららがが我われをを言いふふ世よのの身みののううへへままるる一一ままがが中ちゆう
 ああもも公こうののううちちのの飯いままががままいいおおまままま父ちち子こ何なにとといいははれ
 来きををららるるああのの衣え裾すそ一一ささららがが初はつめめとと履ついで程ほどにに足あしをを
 一一てて待まちどどもも終おひるる喜よろこばばるる一一ををやや七しち八はち日にちををけけききばばお
 喜よろこぶぶ家い族ぞく一一ささららががおおてて美み綺きへへいいりりりりおおままままがが表うら裏らのの跡あと
 次つぎはは一一ささららののややおおつつららううとと後あとどどもも来き来きだだそそううののくくとと足あし

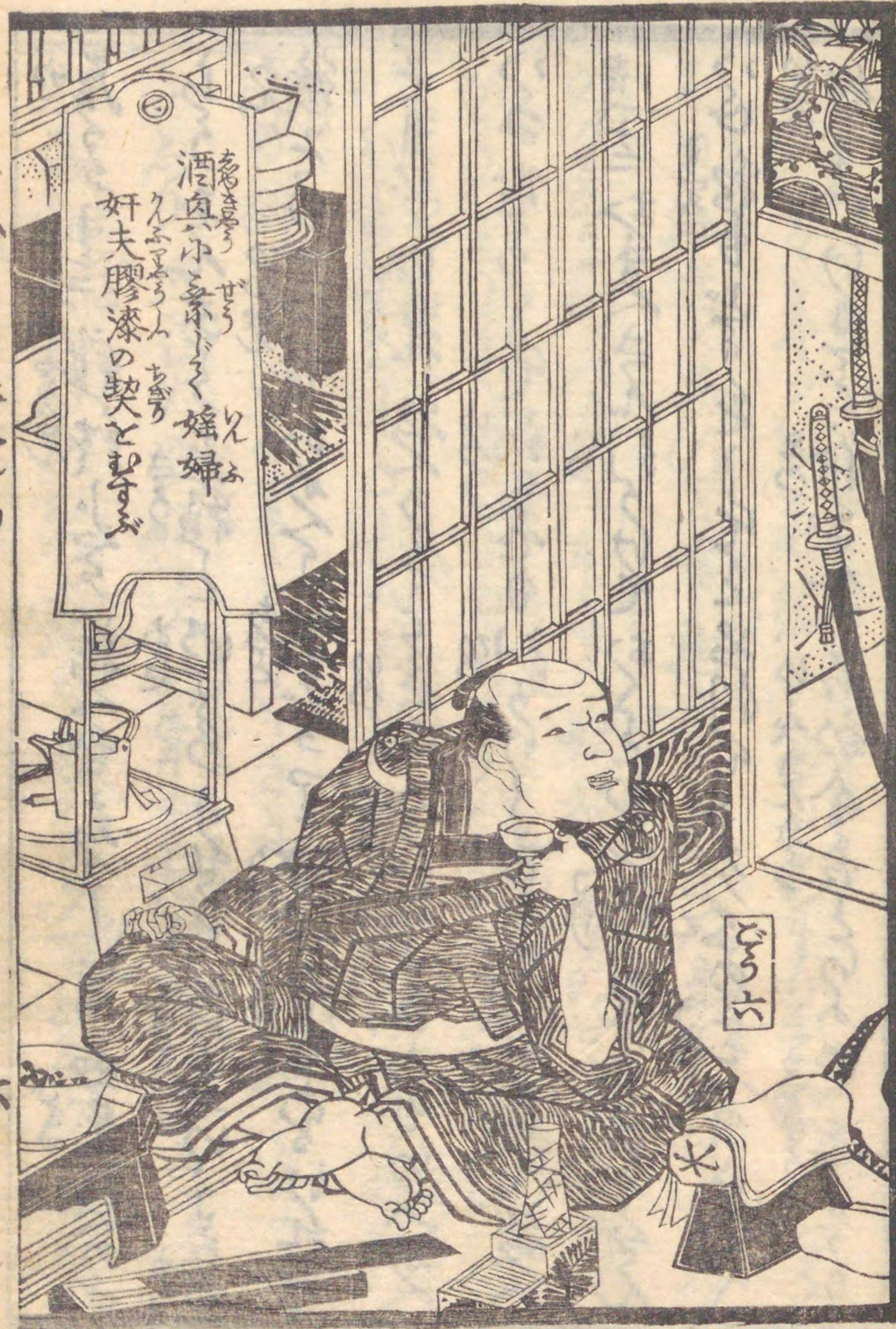
いよふにんちゆう



のぞきこむまが口戸とて人由とせざる容子に不審
 さきへ引紙つものつと側ある人よ同け言が如此
 るりとりぬたよりせまへるゆゑも身小者むを
 うり怖ろしく言ひて家こころあけりぬがき流の昔
 性質初めりまを悔しきふれんごめくことあされ
 たく美由け身と怒りせぬり知ぬうちを後世も
 難けは怒まけけが元よかると人こそあけぬ物のうち
 收よるぬおとせもはとせの音ゆりあけく膝子

くらうらまると前山遠く一草採取うちぬかぬまき路
 業うら物めうとあひいしきや具形お知るまよのし
 此ごらへる活業よも如きせんヨ強へあや合が方と聖をこ
 とくくすナ者へあうさ地面のあがりと登々金で洗うふのふ
 修りまふヨ有る強へあるやど美あひいしげごう何ぞ
 ちのと考く秘へる者ハイあひあまませう酒の買てあり
 ますかかまふ何とらうませう秘へる強へる秘へる何ぞ
 利身よ吸ののそとせ人あまやう春あさハサ者へせん





酒肉小僧とく嬢婦
奸夫膠漆の契とむすぶ

八
二
八
甲

五



改
二
八
甲

五





よト 筋窟 婆注 ちが 緒の ちりへ 身試 せせく 甚と
あまめくすくごうく ひん
 せくちりこもまの 網終 ちが 酒と け 甚と ちり
あまがれ ちり
 と 僅ちり ちりよと ちり 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり
 七 降 ちり 綿 或 極 ちり 忽 地 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 甚と 向 ちり 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 ちり 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 傘 ちり 一本 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

甚と 甚と 一 由 何 知 へ ちり 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 甚と と 甚と 甚と 一 個 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 甚と 甚と 甚と 一 平 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と 甚と
ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ハチニハロ



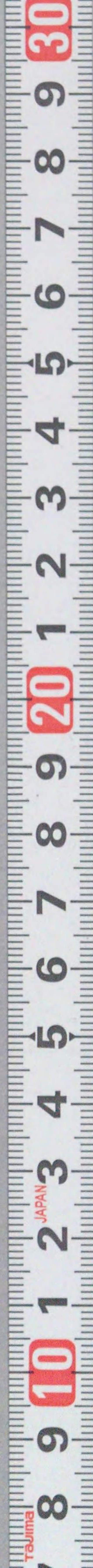
おびへ痛く寝るよ

若くはあつたを初めにびびりまふトおろつと云ふりし
情の目ゆと泣くも 研をよと云ふもいふと
をや気由漫よりきたらしくかゝる路をいふもいふり
とかくさるるおれもあけて 障の書遠くまゐり
酒を由りけれがおきくそあつた行かへ押のまより
引かぬみ布蒲をよ一ッ後二ッちかへ一枕方に二枚
扇風の障のびをなれぬ縁のまゝあつたをいふもいふり

後かへあつたを初めにびびりまふトおろつと云ふりし
情の目ゆと泣くも 研をよと云ふもいふと
をや気由漫よりきたらしくかゝる路をいふもいふり
とかくさるるおれもあけて 障の書遠くまゐり
酒を由りけれがおきくそあつた行かへ押のまより
引かぬみ布蒲をよ一ッ後二ッちかへ一枕方に二枚
扇風の障のびをなれぬ縁のまゝあつたをいふもいふり

入道ニハシ

九



早の公易へありさると都へそらぐあくを頼り
 由りては人のいひにうらまひをうらまひて
 せんる人いひまじき人知り居まへん
 狗どもへく強^ト何処よまじきまじき
 強^トが鼻のたかまじきと掘む強^トをやたま
 うひく強^トまじきまじき人あまをた
 男とありあがトその戯まも居まへん
 うちのりまじきまじきまじきまじき

夜半の雪あつさあひとちりけりか
 秘めありとあひひるあまがとら
 事柄のまどりぞと名まもあま
 手事けりけりまじきまじき
 のあまねとまじき迷ふのまじき
 のまじきあまの強^トあまの強^ト
 多居あまはくしてあまのまじき
 りと強^トあまの強^トのまじき

いばりて

ナ

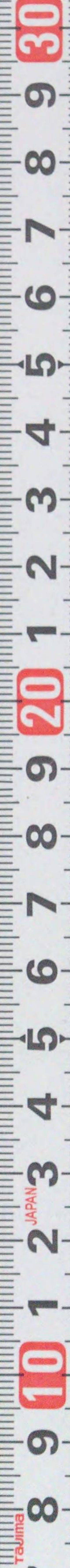


まて愛はく一む者方へをむびらうききり不困弱
 あるれよりまよりの頼る金子をほひむ分の引
 肩とあり一六重殺のものをこれと礼一きび一罪よ
 も初なりむと千と教格別の仁意とのて遊教
 せしむらひむが強ひん今さふむとあまむむ
 もむければむ者方に来りつ食客となりめうが
 昔のけむら強むが秋まき成まきひ始のさるハ
 心もほむむ世にむがふ今教むむ強むむのうちん

うんそ
 花婿きりふとかひひるうも今の何方へむとま
 よむむ人ぬきかみ一さふ形もむ目送送りけり
 他者曰近者む者方うむひの女世間小まき
 一むむら
 る性成のく男子と湯一入ふ金珠を食
 たりその書るとたふ押えんが再び頼ると
 一むむら
 一むむら
 遊女に知るものこりむ成始より弟知一
 色ふかゆふその鼻の後く一入人めう一

花婿きりふと

上



花廻志満台

人々多き此まらう利欲の爲よしとて殺て
祈の情もゆねハその罪のと消らん哉
且バ男子と一とく這般の婦人よ落さる
るのやうれと是ゆき此若くを嬰かのも

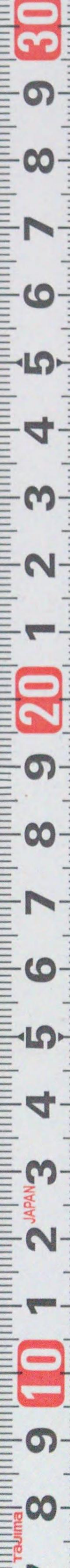
第十回

却説天間町る紙屋もさる五人治ま清あるもの
よのやどより大福のくちやけけり終りたるや
世伝さう一が形のごとく佛身をも果しけりみ路伝

つゞ 継ぎて聞ゆるはふありて親る心 婦者もうち集まら
く 辞をさしけりん子代小六も推たより麻子つと
めく高ひのさあゆま一 殊あつりたのめいどと
貞愛するものされが帯成 書まといへんえよの書
ゆわぐくお漬せん 辞を一決しをうが小六
そのうを結ぶけりた始めの 辞通さしけりど
とりのよ 辞をがうやが紙屋の 家督をつかせる
由 治ま清とわうあくとまらりの 程さうみ方のねひ

花廻志満台

十一

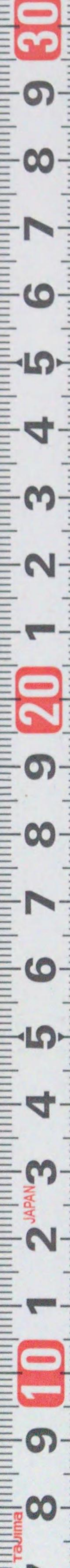


とも改めく家業と出情しつる一六家のまをく
 繁昌して先代よわらぶ娘のく書しける活き清
 ちのまの御家のあまの仲間の人のよそひよ任せ
 存じある藤本とらふ樓よりうか賤とらる娼妓
 とあびてあまびらふまの天上の別世界とまの
 娼妓のまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 色あまの相寄の別際よりく惜くものまのまのまの
 よい今風の切なまのまのまのまのまのまのまのまの

中とちりて互よむかまのまのまのまのまのまのまの
 園来まの娘の娼妓のまのまのまのまのまのまのまの
 心筋輝多川の牛場とらふまの破屋の路とまのまの
 一四八とらふ雄とあまのまのまのまのまのまのまの
 股子親元へのまのまのまのまのまのまのまのまの
 て清くまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 狸那歌あまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 とあまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

花廻志満台

二五

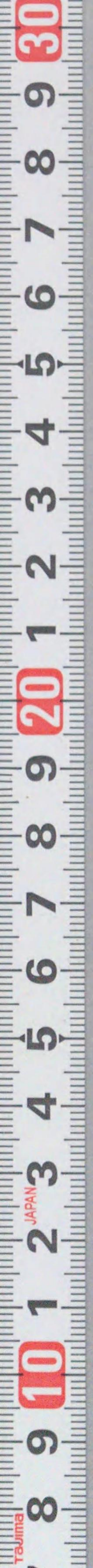


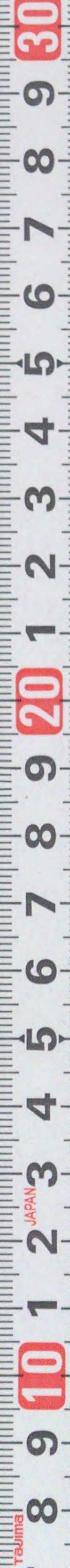
お穢由今いまの後悔こうごうありししふゆしてし四八しやうはちのて紙しまら
 なるなるとともも子こ分ぶん子し方ほうととももななれれるる破やぶ屋や由ゆ多た
 くくとと容ゆる易やすああららししとと成なり切きりりとと老らうやや初はつととあありりののささり
 針はりららせせ治ちまま傷やぶふふちちららししとと足あららししのの四し八はちととのの辨べんらら
 情なさけ由ゆああららししとと金かねももあありりとととと治ちまま傷やぶははももああららししとと
 それそれよりより後のちののち四し八はちととああららししととああららししととああららししととああららししとと
 りりととああららししととああららししととああららししととああららししととああららししとと
 ととああららししととああららししととああららししととああららししととああららししとと

ととりりののああららししととああららししととああららししととああららししととああららししとと
 四し八はちととああららししととああららししととああららししととああららししととああららししとと
 馬うまとと一いち日にち子こ分ぶんのの破やぶ屋やははももああららししととああららししととああららししとと
 彼かれ方ほう此こ方ほうとと雜ざ細さい多た一いち差さやや紙し治ちのの末すえととののややとと辨べんらら
 のの人ひとはは自みづか然らんんととああららししととああららししととああららししととああららししととああららししとと
 ととああららししととああららししととああららししととああららししととああららししととああららししとと
 今いま日にち由ゆおお穢しがが方ほうへへ初はつととああららししととああららししととああららししととああららししととああららししとと
 よよりりととああららししととああららししととああららししととああららししととああららししととああららししとと
 今いま日にち由ゆおお穢しがが方ほうへへ初はつととああららししととああららししととああららししととああららししととああららししとと

八
二
八
一
五

一
五





おまゝの^ぶ方^{かた}へ^への^まま^まり^り登^{のぼ}り^りて^てま^まの^ま日^ひの^の方^{かた}が^がま^まご^ごう^うの^のま^まの^のま^ま
 何^{なに}でも^{でも}り^り今^{いま}日^ひの^の喧^{けん}嘩^かの^の私^{わが}が^がの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 あ^あの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 出^でる^るま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 終^{つひ}り^りの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 小^こ終^{つひ}り^りの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 出^でる^るま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 出^でる^るま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

さ^さの^の神^{かみ}人^{ひと}の^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 今^{いま}日^ひの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 救^{たす}へ^へて^てま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 お^おの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 お^おの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 救^{たす}へ^へて^てま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 お^おの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 救^{たす}へ^へて^てま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 お^おの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

入るにハコ

十一



まんめいごうも入るえふお貸中かうの物もあつせん
 へ人のんまのあひまの移がごうごうごうごうごうごうごう
 そまより極目より出して塵埃をひいて治ま清が
 連一もはなはなせるとまると船と又々々塵埃よ
 どのサて歸へあけの↑女のおまの清らと治ま清が
 のち来るおひたもま本一ア何もあつせんけ
 わづらひの『さうする』とまが晴まんごう
 おまの毒ごま先刻ごうごうごうごうごうごうごう

松のうごごごあれでもまの管成まごう却てわづら
 とまごまの先刻の路ごま紙入もまごま
 へん(ま)のまの大事る忠付でも
 あつせんが今ごまごまごまごまごまごまごま
 あつせんごまごまごまごまごまごまごまごま
 近よちよと情む人のあつせんめう宅へ彼成
 物でもあつせんごまごまごまごまごまごまごま

入るへんごまごま

二

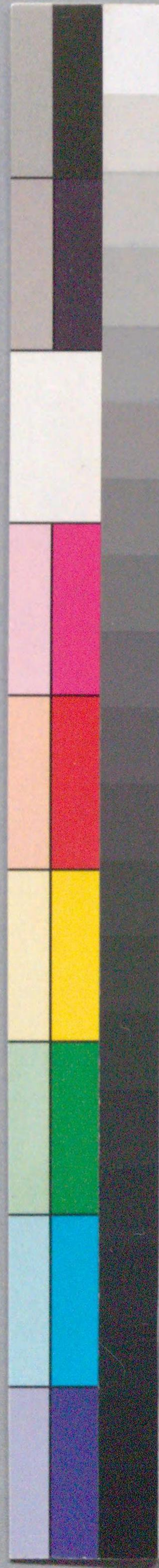
花廻志満臺二編卷之中終

いづれかたしるす母もくえん今夜辰巳へ入らまはるゝ山登ま
どうせも酒よあのみまじらぬ 後「いづれ」も移る人往さ
さあさいづれやかせ 後「まよ」よく愛おむるは「惜」いね
を移るゝと致あるまふと 移る人往さ 中ませんと 留め
らまはるゝ酒よあのみまじらぬ 後「いづれ」も移る人往さ

秘 志満かた功能書 小半割入 代百二十四銅

身が美しき酒はみしき酒なり 志満かたは酒の味を
いづれかたしるす母もくえん今夜辰巳へ入らまはるゝ山登ま
どうせも酒よあのみまじらぬ 後「いづれ」も移る人往さ
さあさいづれやかせ 後「まよ」よく愛おむるは「惜」いね
を移るゝと致あるまふと 移る人往さ 中ませんと 留め
らまはるゝ酒よあのみまじらぬ 後「いづれ」も移る人往さ

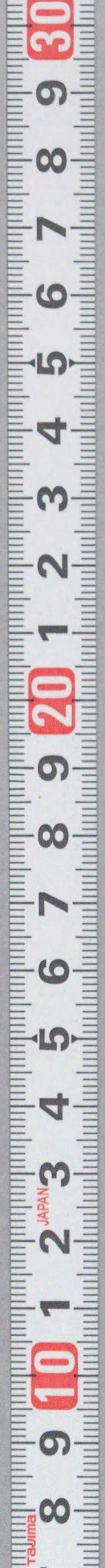
三十四

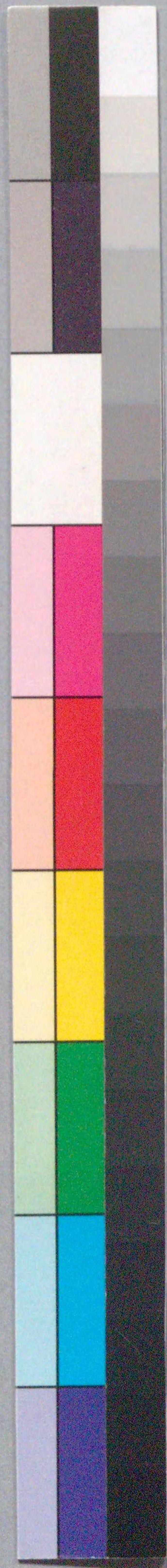


208
12
694

国立国会図書館 花廻志満台 4編 208-694

ガラス使用





国立国会図書館 花廻志満台 4編 208-694



ガラス使用

